



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## 認知モードによる連想照応の考察

著者	五十川 菜里
雑誌名	年報・フランス研究 = Bulletin Annuel d'Etudes Francaises
号	54
ページ	1-16
発行年	2020-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00029233">http://hdl.handle.net/10236/00029233</a>

# 認知モードによる連想照応の考察

五十川 茉 里

## 0. はじめに

連想照応 (anaphore associative<sup>(1)</sup>) とは、先行詞の指示対象と照応詞の指示対象が同一指示ではない照応であり、先行詞または先行文脈の含意する情報によって照応詞の指示対象が求められる照応である。連想照応の照応詞には、原則として定冠詞が用いられる。なお本稿では、先行詞はボールド体、照応詞はイタリック体で示す。

(1) J'ai acheté **un stylo**, mais j'ai déjà tordu *la plume*. (Fradin 1984)

(1) では、照応詞 *la plume* は先行詞 **un stylo** あるいは先行文脈によって導入される。また一般に、身体部位は連想照応されないといわれているが、実際には可能な場合もある。

(2) **Jacques** est tombé du deuxième étage. \**Le pied* est cassé.<sup>(2)</sup>

(Azoulay 1978)

(3) J'ai examiné **l'accidenté** du lit 3. *La jambe* est fracturée. (Ibid.)

(2) では定冠詞を用いた連想照応は容認されず、この場合容認されるのは所有形容詞を用いた *Sa jambe* である。なぜ (2) は連想照応されず (3) はされるのか。いくつかの先行研究では、医学的文脈であれば身体部位の連想照応は可能であると指摘されているが、(2) (3) のようにその区別は曖昧である。本稿では、より明確な成立条件を示すために「認知モード」という概念を用いて考察する。また、先行研究で扱われている例のほとんどは単文の作例であるが、連想照応の容認度は文脈によって差が生じることが多く、先行詞と照応詞の語彙的意味関係だけではなく、談話文脈を考慮することが不可欠だと考えら

れる。本稿では、小説などから実例を挙げて考察する。

## 1. 先行研究

先行研究は主に、「語彙・ステレオタイプの (lexico-stéréotype) 立場」と「談話認知的 (discursivo-cognitif) 立場」に二分される。前者は、先行詞と照応詞の語彙的意味にのみ着目し、そこにステレオタイプの関係があるとする立場である。後者は、談話文脈こそが先行詞と照応詞の間に関係を与えるものとする立場である。

### 1.1. 語彙・ステレオタイプの立場

語彙・ステレオタイプの立場では、連想照応は先行詞と照応詞という二つの名詞句の語彙的意味に基づくとし、先行詞と照応詞にはステレオタイプの関係や全体・部分の関係、内在的关系などがあると説明されている。

(1') J'ai acheté **un stylo**, mais j'ai déjà tordu *la plume*. (Fradin 1984)

(1') では **un stylo** が全体で、*la plume* が部分である。ペンには当然ペン先がついているというステレオタイプの関係が連想照応を可能にしている。しかし、Kleiber は身体とその身体部位は全体と部分の関係にあるのにもかかわらず、連想照応されないという。

(2') **Jacques** est tombé du deuxième étage. \**Le pied* est cassé.

(Azoulay 1978)

一般に、身体部位はなぜ連想照応できないのか。また、医学的文脈であればなぜ可能になるのか。以下に、Kleiber が挙げる条件を示す。

### 1.2. 分離可能性条件と存在論的同質性条件

先行研究では、連想照応が可能となる条件として、先行詞と照応詞は分離可能な関係でなくてはならないと言われている。Kleiber は、連想照応が可能ない条件として (i) 分離可能性条件 (Condition d'aliénation) と (ii) 存在論的同質

性条件 (Principe de congruence ontologique) を挙げる。まず (i) の分離可能性条件の定義から紹介する。

- (i) [...] le référent d'une anaphore associative doit être présenté ou donné comme aliéné par rapport au référent de l'antécédent. (Kleiber 1999)

分離可能性条件とは、照応詞の指示対象は先行詞の指示対象との関係において自立的であり、独立して存在できなければならないということである。先行詞と照応詞は全体・部分の関係になくはならず、さらに部分が全体から独立して存在し得なければならないという。

- (4) Nous entrâmes dans **un village**. *L'église* était située sur une hauteur.  
(Kleiber 1999)

- (5) Ils habitent **un quartier central**. \*J'apprécie *le calme*. (Fradin 1984)

(4) の *village* と *église* はそれぞれが独立して存在し得る。一方, (5) の *calme* という属性は *quartier* から切り取ることができず, それだけで存在することはできないので, 分離可能性条件を満たさず連想照応できない。同様に, 身体と身体部位は分離不可能であるので連想照応できないと Kleiber は指摘する。しかし, なぜ医学的文脈であれば連想照応が可能になるのかについては, 明確には説明していない。次に存在論的同質性条件の定義を紹介する。Kleiber は (6) (7) の例を挙げて, 以下のように条件を提示している。

- (ii) Il semble donc que [...] il y ait un principe de congruence ontologique qui stipule que l'aliénation exigée par l'anaphore associative peut avoir lieu si l'élément subordonné est du même type ontologique que le référent de l'antécédent. [...] *Un volant* est ainsi du même type que *la voiture* : il possède une matière et une forme. *La couleur* de la voiture, par contre, ne possède ni matière ni forme propre, mais exige un support, en l'occurrence celui de la voiture. (Kleiber 1999)

つまり、存在論的同質性条件とは、先行詞の指示対象と照応詞の指示対象が存在論的に同等であるときにおいてのみ、分離可能性というものとは満たされることになるということである。

(6) Paul a lavé et nettoyé **la voiture**, mais a oublié *le volant*. (Kleiber 1999)

(7) Il y avait **une valise** sur le lit.? *Le cuir* était tout taché. (*Ibid.*)

(6) の先行詞の指示対象 *voiture* と照応詞の指示対象 *volant* は、どちらも特定の素材 (*matière*) と形 (*forme*) を持つので、存在論的同質性条件は満たされる。一方 (7) では、先行詞の指示対象 *valise* は特定の素材と形を持つが、照応詞の指示対象 *cuir* はそれ自体が素材であり特定の形を持たず、存在論的に同等ではないので連想照応できない。しかし、以下の例からも分かるように、連想照応とは語彙だけの問題ではない。同じ語彙が用いられていても、談話の文脈によって容認度が異なることがある。

(8) a. Ils passaient par **une église**. *Le curé* était bien connu dans cette région.

b. Ils passaient par **une église**.?? Justement *le curé* sortait de l'église.

(出口 2016)

出口によると、(8a) の方が (8b) よりも容認度は高くなる。(8a) は、先行詞を含む文と照応詞を含む文に時間の経過がないのに対し、(8b) は、「ちょうどその時、司祭が出てきた」と、先行文で登場していなかった司祭が照応詞を含む文で初めて場面に現れ、場面が進展する。場面が進展することで、先に導入された教会との直接的なかわりが薄くなり、連想照応の容認度が下がるという。このように、連想照応の容認度は文脈によって異なることがあるが、Kleiber の挙げる二つの条件は、先行詞と照応詞にしか着目しておらず、連想照応の成立条件の定義としては不十分である。

### 1.3. 談話認知的立場

談話認知的立場は、先行文脈こそが先行詞と照応詞に連想関係を与えるものであるとする立場である。

(9) Paul **se coupa du pain** et posa *le couteau* sur la table. (Kleiber 2001)

照応詞 *couteau* は、先行詞 *pain* から連想されるのではなく、*Paul se coupa du pain* という文脈から連想されるのである。語彙・ステレオタイプの立場に則るならば、*pain* と *couteau* という二つの語彙が直接関係づけられなければならないが、全体・部分の関係や内在的关系があるとはいえず、何をもって連想関係があるといえるのかが明確でない。また、出口も指摘しているが、前節(8)でみたとおり、先行詞と照応詞の語彙は同じでも文脈によって容認度が変わることがある。したがって、先行詞と照応詞の語彙の意味関係によって判断するのではなく、先行文脈こそが先行詞と照応詞に関係を与えていると考えられる。

#### 1.4. 連想照応の範囲

どこまでを連想照応とみなすかという問題については様々な立場があるが、連想照応の範囲を定義することは、連想照応の諸問題を考察する上で重要である。

- (10) *La nuit était déjà tombée. Le journal était tombé au pied du lit. Le cendrier était plein à bord.* (Charolles 1990)

Charolles は、(10) の *Le journal* や *Le cendrier* を連想照応とみなすが、連想照応とはその名のとおりに、先行詞と照応詞の間に連想可能なつながりが必要である。一般に「夜」は、「新聞」や「灰皿」と明らかな連想関係にあるとは考えにくい。「夜」から連想され得る語彙としては、「月」「就寝」などが挙げられる。このように、談話認知的立場では連想照応の範囲に際限がなくなってしまう。そこで、どのような語彙が連想関係にあるといえるのかという判定基準の一つとして、Minsky が提唱した「認知フレーム」を採用する。

When one encounters a new situation [...] one selects from memory a structure called a frame. This is a remembered framework to be adapted to fit reality by changing details as necessary. A frame is a data-structure for representing a stereotyped situation [...]. Attached to each frame are several kinds

of information. Some of this information is about how to use the frame. Some is about what one can expect to happen next. Some is about what to do if these expectations are not confirmed. (Minsky 1977)

フレームとは、経験によって記憶に蓄えられているデータ構造であり、それぞれのフレーム内には、そのフレームに結び付く情報が存在している。例えば、「誕生日パーティーフレーム」の中には、バースデーケーキやプレゼントなどの要素が存在している。事態を認知するときには、記憶の中からふさわしいフレームを選ぶ。さらに、そのフレーム内の情報は、その場面で何が起こるのかを予測するのに役立つ。小田（2012）は、先行詞のない定冠詞を説明するために、認知フレームを以下のように定義している。

1. ある出来事や状況、人・物といった要素、それら要素の属性や要素間の関係などが結びついた知識のネットワークである
2. 文化的に規定されたものであるため、文化圏によって認知フレームの構成要素は異なる。（小田 2012）

認知フレームは文化的に規定されたものであり、文化圏によって構成要素は異なることがある。小田は認知フレームの例として、「結婚フレーム」を挙げる。一般に西洋式の結婚式には新郎、新婦、ウェディングドレス、結婚指輪、ブーケ、招待状などが想起される。

つまり、認知フレームとは、それぞれの語彙は個々に知識の中にあるのではなく、ある語彙と他の語彙が結びついて存在しているという考えである。談話認知的立場ではどこまでを連想照応とみなすのかが定かではないと指摘されるが、先行詞と照応詞が同じ認知フレーム内に含まれるかということを連想照応の基準の一つにできると考えられる。

次に、出口も指摘するように、連想照応の容認度にはかなり個人差が出るという問題についてであるが、インフォーマントの中には「これが小説の一節だ

とすると容認可能である」と答える人がいることもある。しかし、なぜ小説の一節であれば容認度が上がるのかについて、先行研究では説明されていない。小説の一節であれば容認度が上がるということは、初出の定名詞句<sup>(3)</sup>についてもいえることである。そこで、小説内の初出の定名詞句について、なぜ定冠詞の使用が可能になるのかを考察し、なぜ小説の一節であれば連想照応の容認度が上がるのかということについても同様の観点から考察を試みる。

一般に定冠詞は、話し手と聞き手の共有知識内にあるもの、あるいは、どれのことかが聞き手にも分かるものに用いられる。しかし、初めて談話に登場するもの（どの対象のことかわからない場合）にも定冠詞が用いられることがある。これは、Grannis (1972) の「唯一性に関する共謀」(conspiracy of uniqueness) によって説明される。

In effect, by using the definite article he (=the speaker) is inviting his conversation partner to share in an attitude of uniqueness in respect to the concept in question. [...] In effect, he is inviting – or compelling – his listener to share in a conspiracy of uniqueness. (Grannis 1972)

Grannis は、話し手が聞き手に話題となっている物事を共有するように促す、あるいは強制するという。

(11) The man who spoke to me is my uncle. (Grannis 1972)

「話し手に誰かが話しかけた」ということを聞き手があらかじめ知っていたかどうかは問題ではなく、重要な点は、話し手が談話内の指示対象を定義づけているということを示すために定冠詞を使ったということである<sup>(4)</sup>。さらに、小説では会話以上に初出の名詞句に定冠詞が用いられやすい。語り手は初めて物語に登場するものでも、物語の世界に既に存在するものとして提示することができ、読み手もまた、初めて出てくる対象の存在を想定しながら読むのである。小田 (2019) は、小説家は、ある物語に初めて登場する人物や事物をあたかも既知の存在であるかのように読者に提示できると指摘し、物語



の冒頭でいきなり現れる定冠詞付きの名詞について、Grannis の「唯一性に関する共謀」をもとに以下のように述べる。

物語の作者と読者は指示対象の存在前提に関して共犯関係にあると言えます。小説の地の文には、作者と読者の共犯関係によって成り立つ定冠詞がしばしば現れます。(小田 2019)

このように、小説では作者と読者の共犯関係によって初出の語句にも定冠詞が用いられることが多い。小説の一節だとみなすと連想照応の容認度が上がるということについても同様に考えられる。つまり、先行詞と照応詞が一見連想関係にないように思われる場合でも、読者は、照応詞をその物語の文脈内において先行詞となんらかの連想関係があるものだと考えて読むのである。

### 1.5. 描写性

連想照応の容認度に関して、出口 (2016) は「描写性」に着目し、先行詞と照応詞の指示対象以外の要素が関与することで連想照応が可能になる例について、描写性の高さが関係していると指摘する。

(12) a. Paul a acheté **une voiture**. \**La couleur est rouge.* (出口 2016)

b. Paul a montré **une voiture**. ?*La couleur est rouge.* (*Ibid.*)

車を見せるという状況、イベント内においてのみ、車と色が一時的に包摂関係をつくり、すなわち、先行詞を含む文が表すイベントにおいて、照応詞を含む文が表す内容が包摂されているような関係が連想照応の容認度を上げるという。描写性の高い文脈とは、先行表現を含む文 (以下 S1) と照応詞を含む文 (以下 S2) が同一の場面を共有しており、先行文に現れた事態に対して S2 が記述を加える場合であるという。さらに出口は、S1 と S2 が同じ時間上に認められることが必要であり、時間の経過が存在してはならないという「時の制約」を提示する。しかし、本研究の調査によると、この「時の制約」にはいくつか問題がある。

(13) a. Il arriva **une voiture** devant le magasin. *Le conducteur* était né en Bretagne.

b. Il arriva **une voiture** devant le magasin. ?? *Le conducteur* descendit de la voiture. (出口 2016)

出口は (13 a) の方が (13 b) よりも容認度が高いことを指摘し、その理由として (13 a) は S1 と S2 が同一場面を描写しているためだという。つまり (13 a) では半過去<sup>(5)</sup>が場面の背景を描写しており、S1 と S2 の間に時間の経過がないことで、車と運転手の関係が保証されるのに対し、(13 b) の単純過去は事態を展開させ、S1 と S2 の間に時間の経過や場面の転換を生むため容認度が下がるという。しかし、「車が店の前に止まった」ということと「運転手がブルターニュ出身であった」ということは、同じ場面を描写しているといえるのだろうか。本研究で実施したインフォーマント調査によると、出口の主張とは異なり、(13 b) は容認度が高いが (13 a) は不自然であるという結果が得られた。確かに半過去は背景描写に用いられることが多いが、(13 a) の S2 は恒常的な性質（運転手の出身）を表しており、S1 が表す場面と同じ場面を表すとは考えられない。実際に、時間の経過があっても連想照応が容認される例は確認される。

(14) J'ai acheté **un stylo** hier, mais *l'inspiration* ne vient pas.

(Charolles 1990)

(14) では時間の経過は認められるが連想照応が可能である。したがって、S1 と S2 に時間の経過が存在しないことで描写性が高まり、描写性が高いと連想照応が可能になるという説は不十分であると思われる。

## 2. 認知の方法

出口は、描写性が高まればなぜ連想照応が可能になるのかを説明していない。また、時の制約という条件では連想照応の成立条件を示すことができない。そこで本稿では、描写性の高さではなく、どのように描写するのかという

認知の方法に焦点を当てて考察する。

## 2.1. 認知モード（I モード認知・D モード認知）

認知モードとは、ある事態を誰がどのように認知するかという認知の方法である。同じ事態を表現するのにも、その表現は様々である。中村（2009）は、認知モードを言語の主観性・客観性の問題を身体的インタラクションのあるなしを導入して捉える考え方であると定義しており、その捉え方には、なんらかの環境・対象と身体的にインタラクトして事態を眺める I モード認知（*interactional mode of cognition*）と、外界をそこに客観的にあるものとして眺める D モード認知（*displaced mode of cognition*）があるという。

また中村は、認知の仕方は言語によっても異なる傾向があると指摘する。例えば日本語と英語を比較すると、前者は I モード認知的、後者は D モード認知的といえる。日本語では、「私は寒い」とは言えるが「\*太郎は寒い」とは言えず、英語では、*I am cold.* と同様に *Taro is cold.* とも言える。これは、日本語の「寒い」は状況の寒さを直接経験している人（身体的にインタラクトしている人）の感覚しか表さないのに対し、英語の“*be cold*”構文はインタラクションを伴わず、視点のみの移入を許すからである。

本稿では、中村による認知モードの定義に基づき I モード認知と D モード認知を用いて、連想照応が可能な場合と不可能な場合の違いを考察する。認知モードをより詳しく理解するために、類似の概念である事態の把握の仕方について次節以降で説明する。

## 2.2. 主観的把握と客観的把握

池上（2006, 2011）は、英語表現と日本語表現の対比として以下の例を挙げ、事態の捉え方を主体的把握（*subjective construal*）と客観的把握（*objective construal*）に二分する。

(15) (他に誰もいない部屋の中の様子を誰かに伝えて)

a. 「(ここには) 誰もいません。」

b. “Nobody’s here except me.” (池上 2006)

(16) a. ハンドルの前に座る

b. sit behind the wheel (同上)

(15 a) は自分の視界に誰もいないことを表現しており, (15 b) は自分を含めたその場の様子を客観的に表現している。(16 a) は自分が運転席についているようなイメージで捉えているが, (16 b) は運転手が座っているのを外からのイメージとして捉えている。日本語では, 話し手は自身が見えているもののみを捉えるのが普通であり, 英語では, 話し手自身が見えているもののみならず, 他者化／客体化した自己を含んだ事態をメタ認知的に外から捉える。日本語は主観的把握傾向, 英語は客観的把握傾向にあるといえる。主観的把握では認知主体である自分が認知対象の中に入り込むので, 事態を俯瞰することができず非有界 (unbounded) 型認知となるが, 客観的把握ではメタ認知的に全体を捉えるので有界 (bounded) 型認知となる。主観的把握と客観的把握は, 中村の I モード認知と D モード認知と同様の概念であるといえる。池上は認知主体が対象の中に入り込むというが, これは中村のいう身体的にインタラクトしているということである。

### 2.3. 自己投入と自己分裂

郡 (2019) は, 池上の主観的把握と客観的把握をもとに, 自己投入 (self projection) と自己分裂 (self split) という用語を用いて, 事態をどのように認知するかを次のように説明する。主観的把握では, 話し手がもともと問題の中に身を置いている場合, そのままの状況で事態を把握することになるが, もともと問題の事態の外に身を置いている場合は, 問題の事態の中に身を置くような自己投入することが必要である。一方, 客観的把握の場合, 話し手がもともと事態の外に身を置いているなら, そのままの状況で事態把握すればよいが, もともと問題の事態の内に身を置いている場合は, 話し手は問題の事態の外に身を置くよう自己分裂の過程を経ることが必要である。

(17) 「ジョウンズさんとお話できますか?」「私です。」

“May I speak with Mr. Jones?” “This is he.”（池上 2006）

英語では、発話者は問題の事態の内から外に身を移し、一人称ではなく三人称を用いて述べる。いわば自己分裂して描写している。以上、二章で紹介した認知の方法を以下の図にまとめる。

I モード認知	D モード認知
主観的	客観的
対象の中に入り込む認知	メタ認知として全体を捉える
非有界的認識	有界的認識

図 1

このように、同じ事態であっても I モード認知（主観的把握）で捉えるか、D モード認知（客観的把握）で捉えるかによって、表現の仕方は異なる。

3. 身体部位の連想照応

二章で説明した認知モードの概念を用い、身体部位の連想照応の例を考察する。

3.1. 身体部位の連想照応の例

先行研究では、身体部位は連想照応されない、あるいは医学的文脈でのみ連想照応されると指摘されているが、実際には以下のような例が挙げられる。

(18)（頭を怪我した警官が医者に向かって尋ねることば）

Et les cheveux repousseront?

(Georges Simenon, *La tête d'un homme*, p.52)

(18) は登場人物の発言であるが、自分の身体部位について所有形容詞ではなく定冠詞を用いて言及している。インフォーマントによると、発話者は自分の警察官としての立場や、聞き手が医者であるということを考慮し、指示対象か

ら距離を置くようにして事態を認知・表現しているという。すなわち、自分自身に関する事態であるのにもかかわらず、自己分裂して外界に身を置き、外界から事態を眺めるように D モード認知で捉えている。

(19) (若い刑事ルロワが上司であるメグレの様子を窺う場面)

[...] l'inspecteur Leroy ne connaissait pas encore assez **Maigret** pour juger de ses émotions d'après sa façon de rejeter la fumée de sa pipe. Des lèvres entrouvertes du commissaire, ce fut un mince filet gris qui sortit lentement, tandis que *les paupières* avaient deux ou trois battements.

(*Ibid.* p.167)

(19) は小説の地の文であり、ルロワの主観でメグレの様子を窺っているというよりは、むしろ、ルロワがメグレの様子を窺っているのを外からメタ認知的に眺めているように描かれている。つまり、事態に対して身体的インタラクションがなく客観的に眺めているので、メグレのまぶたのみを取り上げて描写することができる。

(20) (映画監督のフェランと撮影技師のウォルターが代役の外見を吟味する場面)

Ferrand : Ça va, Walter, je crois. Ça ne vous ennue pas, monsieur, de faire quelques pas devant nous, pour que nous puissions nous rendre compte?

La doublure d'Alexandre : Oui, bien sûr.

Walter : Ah! *les cheveux* dans le cou sont un peu longs.

Ferrand : Il faudra que ça aille, il faudra que ça aille, mais . . .

(*La Nuit américaine*, film de François Truffaut, 1973)

ウォルターは撮影技師としての立場から、指示対象を客観的にそこにあるものとして捉えている。事態を観察・分析するときは、主観的ではなく客観的に捉えるためである。D モード認知では、指示対象を外界にあるものとして客観的に眺めるので、身体部位であっても身体から分離させて捉えると考えられる。そのために D モード認知では身体部位の連想照応が可能なのである。

### 3.2. 所有形容詞との比較

身体部位が定冠詞を伴って連想照応されない場合のほとんどにおいて、身体部位名詞には所有形容詞が用いられる。そこで、身体部位名詞につく所有形容詞と定冠詞を比較する。

(21) (マルグリットの墓を掘り起こした場面)

*Les yeux ne faisaient plus que deux trous, les lèvres avaient disparu, et les dents blanches étaient serrées les unes contre les autres.*

(Alexandre Dumas fils, *La Dame aux camélias*, p.77)

インフォーマントによると、(21) で所有形容詞を用いるのは不可能ではないが、非常に不自然だという。墓を掘り起こしてでてきた死体を描写する場面であり、普通はその事態に自己投入しないからである。

(18') (頭を怪我した警官が医者に向かって尋ねることば)

*Et les cheveux repousseront?*

(Georges Simenon, *La tête d'un homme*, p.52)

(18') では所有形容詞を用いることも可能であるが、その場合、*Et mes cheveux vont repousser?* の方がより自然な表現であると回答するインフォーマントもいた。近接未来と単純未来について南館 (1998) は、前者は事態が発話時点に結び付いて主観的であり、後者は発話時点とは隔たりがあり客観的であると説明する。すなわち、単純未来は自己分裂して事態を客観的に捉える D モード認知と相性が良いといえる。また所有形容詞は、所有者を示すために事態の中の自己との関係を意識するので、自己分裂や事態の外に身を置く捉え方には用いられず、定冠詞と比較すると I モード的である。

## 4. おわりに

本稿では、連想照応が可能な例と不可能な例を比較し、可能な場合の成立条件を考察した。先行研究では、身体部位は連想照応されない、あるいは医学的文脈でのみ可能であるといわれてきた。例えば Kleiber は、連想照応が成立す

るには先行詞と照応詞が分離可能でなければならないといい、身体と身体部位は分離不可能であるので連想照応されないというのが、一方で医学的文脈は例外だという。しかし、本稿で事例を挙げたとおり、医学的文脈以外でも身体部位は連想照応される。そこで、談話文脈を考慮し、事態をどのように捉えているかという認知モードを用いて、成立条件の提示を試みた。

認知モードには、なんらかの環境・対象と身体的にインタラクトして事態を眺める I モード認知と、認知の場の外に出て事態を客観的事実として眺めているようなメタ認知的な捉え方の D モード認知がある。D モード認知では、事態と身体的インタラクションがなく外界にあるものを眺めるように捉えるので、発話者が自身の身体部位について描写する際も、指示対象（身体部位）を自分の外にあるものとして捉える。つまり、身体から身体部位を分離させて捉える。以上のことから、D モード認知で捉えると分離可能性条件を満たすので連想照応が可能になると考えられる。

#### 注

- (1) 連想照応 (anaphore associative) は他に、概念照応 (anaphore conceptuelle)、間接照応 (anaphore indirecte)、橋渡し推論 (bridging inference)、推論可能物 (inferables)、と呼ばれることもある。
- (2) 本稿で用いる文頭の \* は、例文がその文脈では連想照応として容認されないことを示す。また文頭の ? は容認度が低いことを示し、?? はさらに容認度が低いことを示す。
- (3) 初出の定名詞句については、Fraurud (1996) や Löbner (1985) を参照。
- (4) The important point is that the speaker has used a definite article in order to signal that he is uniquely defining a mutual word of discourse, and he provides the relative clause in order to help delimit that world. Using a word that has recently become fashionable among linguists, we might justifiably talk about a uniqueness “conspiracy” on the part of speaker and listener. (Grannis 1972)
- (5) *Le conducteur était né* は大過去であるが、ここでは出口が説明するとおり「半過去」と記述しておく。この大過去は、事態の背景描写に用いられているため、この点に関して半過去と同等に扱っていると考えられる。



## 主要参考文献

- Azoulay, A. (1978), Article défini et relation anaphoriques en français, *Recherches linguistiques*, 7, pp.5-47.
- Charolles, M. (1990), L'anaphore associative, Problème de délimitation, *Verbum*, 13-3, pp.119-148.
- Fradin, B. (1984), Anaphorisation et stéréotypes nominaux, *Lingua*, 64, pp.325-369.
- Fraurud, K. (1996), Cognitive Ontology NP Form, in T. Fretheim and J. K. Gundel (eds.), *Reference and Referent Accessibility*, Amsterdam, J. Benjamins, pp.65-88.
- Julien, J. (1983), Sur une règle de blocage de l'article défini avec les noms de parties du corps, *Le français modern*, 51-2, pp.135-156.
- Grannis, O. C. (1972), The Definite Article Conspiracy in English, *Language Learning* 22-2, pp.275-289.
- Kleiber, G. (1999), Anaphore associative et relation partie-tout : condition d'aliénation et principe de congruence ontologique, *Langue française*, 122, pp.71-99.
- Kleiber, G. (2001), *L'anaphore associative*, Paris, PUF.
- Löbner, S. (1985), Definites, *Journal of semantics*, 4, pp.279-326.
- Minsky, M. (1977), Frames system theory, in P. N. Johnson-Laird et al. (eds.) *Thinking. Reading in Cognitive Science*, New York, Cambridge Univ. Press, pp.355-376.
- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』NHK 出版.
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座 第5巻主観性と主体性』ひつじ書房, pp.49-67.
- 大久保伸子 「体の一部を表す名詞における所有形容詞と定冠詞」, 『フランス語学研究』19号, pp.97-107.
- 小田涼 (2012) 『認知と指示 定冠詞の意味論』京都大学学術出版会.
- 小田涼 (2019) 『中級フランス語 冠詞の謎を解く』白水社.
- 郡仲哉・都築雅子 (2019) 『語りの言語学的／文学的分析 内の視点と外の視点』ひつじ書房.
- 出口優木 (2016) 『連想照応の可能性 ―フランス語の用例から―』朝日出版社.
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」, 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編) 『「内」と「外」の言語学』開拓社, pp.353-393.
- 春木仁孝 (1985) 「le N と ce N による前方照応について」, 『フランス語学研究』19号, pp.88-97.
- 南館英孝 (1998) 「Aller + inf. と単純未来」, 東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える』三修社, pp.22-33.